

キクの冬至芽発生に及ぼすエスレルの効果について

豆塚茂実・小林泰生 (福岡県農業総合試験場)

Shigemi MAMETSUKA and Yasuo KOBAYASHI : Effect of Ethrel on the Sprouting of Sucker in Summer Flowering Chrysanthemum

キクの専作経営における周年生産体系の中で、秋ギクの電照栽培後に定植する夏ギクの促成栽培は重要な作型である。

夏ギクの促成栽培は、主に、冬至芽苗を用いているが、育苗期間が秋ギクの電照栽培期間と重なり、労力が競合するために、そろいの良い冬至芽苗を効率よく育成する方法が望まれている。本試験では、良苗生産を目的に、晩生夏ギクの冬至芽発生に及ぼすエスレル処理の効果について検討したので、その結果について報告する。

1. 試験方法

供試品種として“精雲”“潮風”を用い、親株定植は、1987年7月10日に行った。親株のせん定は、8月14日から9月4日まで1週間ごとに行い、エスレル処理は親株せん定直後に、2,000ppm溶液を葉面散布して、第1表のように処理した。せん定後、発生したわき芽は、エスレル処理4週間後にさし芽を行い、さし芽2週間後に定植して、冬至芽の発生について調査した。

2. 結果及び考察

1) さし芽時の莖長は、処理区では8月21日処理区が最も長く、その後、処理日が遅くなるほど短かった。葉数についても莖長と同様な傾向が認められた。エスレル処理により、莖長は短くなり、葉数が増加して節数の多いロゼット状の穂になったが、エスレル処理区においても、莖長、葉数は8月21日処理区が優れ、その後、莖長は短くなり、葉数は減少した。

2) さし芽苗の発らい率は、品種では“潮風”が高かったが、処理日による一定の傾向は認められなかった。エスレル処理により、発らい率が低くなり、“精雲”は8月14日及び21日処理区で、“潮風”は8月14日処理区で発らいが全く認められなかった。

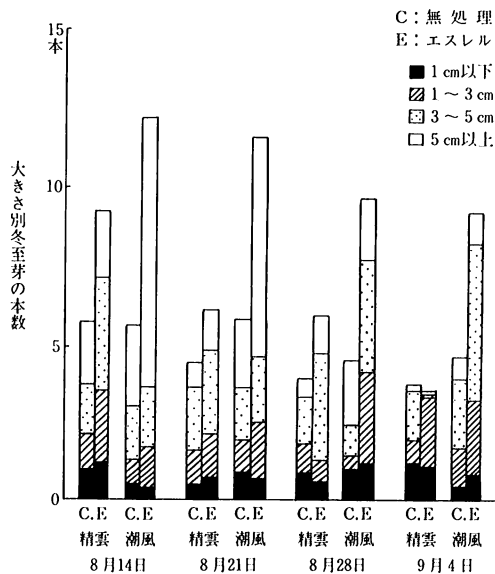
第1表 試験区の構成

試験区	親株せん定日	エスレル処理
1	8月14日	無処理
2		エスレル 2,000ppm 散布
3	8月21日	無処理
4		エスレル 2,000ppm 散布
5	8月28日	無処理
6		エスレル 2,000ppm 散布
7	9月4日	無処理
8		エスレル 2,000ppm 散布

3) 1株当たりの冬至芽の発生本数は、“潮風”が“精雲”に比べて多く、明らかな品種間差が認められた。また、親株のせん定日が早い区ほど本数が多く、さらに、各せん定日ともエスレル処理により増加した。エスレル処理により“精雲”は8月14日から28日までの処理区で、長さ3cm以上の冬至芽数が、“潮風”はすべての処理区において、長さ1cm以上の冬至芽数が多くなった。

4) 各処理区の冬至芽を1988年1月12日に無加温ガラス室に定植し、生育及び切花時の諸形質について調査を行ったが、処理間に有意な差は認められなかった。

以上のように、親株せん定直後にエスレル散布を行うことにより、花芽をもたない、節間の短いわき芽を発生させることができる。このわき芽をさし芽して、発根後、定植した株から発生した冬至芽は、無処理区に比べて、本数が多く、生育は優れ、これらの冬至芽を利用した切花についても品質的な問題は認められなかった。親株のエスレル処理により夏ギク促成栽培における良苗生産が可能になり、さらに、優良品種の大量増殖等にも応用できるものと思われる。



第1図 エスレル処理時期と冬至芽の発生本数 (一株当たり)